

●死後の処置

私の住んでいた家は壊して整地し、ビルか駐車場の用地に売ってしまう。そうすればそこには何も経緯を知らない人の、過去とはまったく切り離された新しい生活の営みが始まる。私はむしろそれが見たい。初七日も一周忌も、生き残っている人には迷惑なだけだからする必要はまったくない。肉体が消えてなくなったのを機に、要するにぱたりと一切の存在が消えてなくなるようにしてほしい。考えてみると、人から忘れ去られる、というのはじつに祝福に満ちた爽やかな結末である。地球上が銅像や記念館だらけになったら、それはむしろ荒廃を意味するからだ。

●たくましさ

お母さんは台所をしながら光子に言った。

「腕くらいなくたって、楽しく暮らせるのにね」

「手が不自由だと、どれくらい困るのかね」

光子はそんなことを想像してみたこともなかった。

「ほとんど困らないだろうよ」

聞きようによっては、お母さんは同情心がないのではないかと思うような言い方をした。

「何がなくても、ほとんど人間は何とかやっていけるらしいよ。視力がなくても、耳が聞こえなくても、何とかやっていける。お母さんが東京に住んでいた時、隣のうちの子が目が見えなかったけど、鬼ごっこだってゴム飛びだって一緒に遊んだよ。ぜんぜん労(いたわ)った覚えのないものね」

「へえー」

「何がなくちゃだめだ、とか、誰がいなくちゃいけない、なんて思うのは、間違いなのよね。何がなくても、誰がいなくても、人間は何とかやって行くんだから。ことに自分がいなかったら大変、なんて思うのは大間違いね。そんなことを思うから、威張る人が出てくるの。」

●友人

私はこの頃、「あるがまま」ということの意味をしだいに大きく感じるようになって来た。私の友人にも、じつにいろいろな性格の人がいる。その多くは私の性格とかなり違っている。

たとえば、私はテレビに出るのが気億劫(きおつくう)である。パーティーに出ることと、写真を撮られることも、苦痛に近い辛さである。テニス、カラオケ、ゴルフ、麻雀など、人がすることはどれもせずつて来てしまった。お金は大好きなのだが、お金を小まめに廻すという操作がどうしても完全にできない。

しかし、ふと気がついてみると、私の友人には、けっこうテレビ人間だったり、彼女自身が望むと望まざるとにかかわらずパーティーのホステスを務めざるを得ない境遇にいたり、テニスとゴルフと麻雀の付き合いが多かったり、カラオケ愛好家だったりする。

しかしそれでも、私とその人との友情に支障がないのは、私たちがお互いに、「あるがまま」を許容して、相手の本質の部分の本気で批判したり、拒否したり、冒したりしないからだと思う。つまり私たちはお互いが一致する部分で付き合い、相手が不得意とする分野や体質的に合わない部分には、けっして相手を引きずり込まない、という礼儀を守って来たのである。彼女ばかりではない。私を許容してくれた友人の総てが、例外なくそのルールに従っており、私もその爽やかな関係を保ちたいと考えて来たのである。

●老人の最期にしてはいけないこと

一つは点滴、一つは気管切開だという。点滴は、生体のバランスを失わせる。食べないなら食べないなりに、飲まないなら飲まないなりに、かなりひどい状態でも、何とかそこで辻褄を合わせて生きて行くようにする仕組みが人間にはあるのだが、それを強引に崩すのが点滴だという。

食べるという行為は、それができる限り、生体のメカニズムに自然に組み込まれる。しかし点滴をやると、「細胞が水浸しようになって」（と私は記憶しているのだが、日野原先生はそんな表現はなさらなかったかもしれない）呼吸さえ苦しくなることがあるという。

気管切開は、最期の言葉を奪う。人間は死ぬまで、意思表示のできる状態でいなければならない、と先生はお話しになった。

●葬式

親たちは、密かに静かに、自分らしく死んだ。彼らの望みで、私たちは、その死を世間にはひた隠しにした。

特別な人を除いて死は家族のものである。葬式は家族の行事である。ましてや長生きして、社会から引退していた人の死は、秘かに静かにあるのが、私は好きだ。しかし死の後始末は、その家の好みによっていかようにもすればいい。

●努力家

努力家という人は、ほんとうは困った存在だと思う。怠け者を自覚している人は、自分にも他人にも会社にも社会にも負い目があるから、けっしていばらない。その結果、自分の本質と評判がかなり一致する。しかし努力家は、自分は正当なこと、立派なことをしていると思い込んでいるから、他人も自分と同じようにすること、他人が自分に感謝と称賛を送ることを、必ず心の中で要求している。

●疑いの精神

俳優さんやタレントの、主としてお噂話を主体とした女性週刊誌などを熱心に読んで、「誰それさんは、こうなんですって」など架空の出来事に対して憤慨したり、喜んだりしている女性を見ると、私は女が男と同じ能力を持つことを示すためには、まずこの手のむだな情熱に時間を費やすことと、世間を簡単に信じるその善良さを追放しなければならない、と思ってしまう。ものの本質を見抜くこと、甘くない現実を認識することは、疑いの精神から発するのである。

●悪くて当然

悪くて当然と思っていると、人生は思いの外、いいことばかりである。しかし社会は平和で安全で正しいのが普通、と信じこんでいると、あらゆることに、人は不用心になり、よくて当たり前と感謝の念すら持たないようになり、自分以外の考え方を持つ人を想定する能力にも欠けて来る。それだけでなく、少しの齟齬にすぐ腹を立て、失望しなければならない。

●片隅に生きる

片隅に生きるということはほんとうにすばらしいことなのだ。悪の影響は薄まり、思い上がるということなく済み、かつ、基本的な自由を謳歌できる。自由のない生活など、人間の基本的な幸福さえ拒否されているということだ。そのような職業(例えば政治家)に就きたがる人の気持ちが私にはどうしてもわからない。ささやかな悪行が、ささやかにできる場所にいないと、人間は囚人になってしまう。

●浮気

しかし結婚というシェルターみたいなものの存在を充分に利用しながら、浮気という禁断の木の果もおいしい、というような甘えた男女が私はどうも好きになれない。

夫以外の男との浮気はどうして心を震わすのだろう、などと聞くと、そんなことにしか心が震えないんですか、と聞き返したくなる。ささやかな人間関係の信頼に応えない人生は、基本のところではばらしくもないし、ドラマチックでもないのである。

●老後の生き方

人間は、その人の体力に合う範囲で、働くことと遊ぶことと学ぶことを、バランスよく、死ぬまで続けるべきなので、もうアメリカ式の引退したら遊んで暮らす、という発想は時代遅れだと思う。そして当然のことだが、できればただ自分が生きるため以上の働き、つまり人の分も生産する働き、をしたほうが良いと思う。

(中略)

老人に「年に甘えないで、もっと働いてください」と言うと、怒るだけでなく、喜ぶ人もけっこういそうである。それが老人の健康の度合いを計るバロメーターになりそうだ。

●色気

色気というと、日本人の多くは、セックスの話をする事だと思っている。それほど日本人はその点について教養も貧弱なら、教育も悪いのである。色気の基本は、相手に関心がありますよ、という気持ちであり、それを態度で示すことである。現実にはそうでなくても、男も女も礼儀として、相手に関心がありますよ、と言いつけなければならない。関心ということは、これまたセックスの問題ではない。「あなたとお話することは楽しいことです」ということなのである。

●信仰や宗教

日本人は信仰や宗教について、恐ろしく鈍感で無礼である。そのようなものは科学的態度に反する無知なものだから、少々否定的に無視しても当然という感じである。しかし信仰や宗教ほど怖いものはない。人が時には命よりも強いよりどころとしているものを、いい加減に扱うということは、その人に対する非礼だし、そのような不用心な感覚で国際化などできるわけがない。

●友情の基本は尊敬である

私は友情の基本は「あの人には自分にはないすばらしいところがある」と思うことだと思っています。つまり友情の基本は尊敬だ、ということであり、それは、友と自分が社会的にどういう位置にあろうと、常に自分は相手を仰ぎ見る、という基本姿勢なのだろうと思うのです。

その理由ははっきりしています。

神の眼から見た評価と、この世の評価とは違うからなのです。同じ同級生でも、クラス会で上席に着くのは、なぜか早く社長になった人でしょう。しかしおもしろいことに多くの場合、現世で地位の高い人ほど、神から受ける評価は高くないようです。もちろん、自分のほうが相手よりましな暮らしをしていると思われる場合もなくはないでしょう。しかし他人の汚点はすばやく見つけ、他人の美点はいっこうに見えないというのが、私たち人間に共通の品性の貧しさというものです。

ですから、私の知らない美点があるに違いない他人を上座に据えようとする気持ちが必要になってきます。それは相手の優越を受け入れ、認め、喜び、習おうとする、しなやかで闊達な心の現われなのです。そういうはっきりした基本がないと、友情などというものも、けっしてすこやかに成長することはないのです。

●明るさ

明るいということが、贅辞の一種だとなったのはいつからのことだろう。明るさは確かに救いの場合もあるが、鈍感さや、個性のなさや、無思想の代わりに使われることもある、ということ、多くの人は気づいていない。

●死刑反対

今や死刑反対は世界の流行である。自分や家族の死と無関係のところ、死刑に反対するのは簡単なことで、でも、そうすれば私たちは簡単に「いい人」「人道主義」を装(よそお)える。そういう時には、私はちょっと立ち止まって「いい人」にならないように用心することになっている。そして、自分の愛する者を殺した相手を、心から許せるような自分になることを、あらためて死ぬまでの目標におくのである。

●品位

しかし現在、人間が関心を持つのは、風評であり、評判であり、金であり、時にはただ何でもいから有名になることなのだ。どんな行動でも、立居振る舞いでも、道徳の範囲でも、世間がやるならやっいいいのである。その結果、じつに薄汚い主婦の売春とか浮気とか万引きとか、学生のヌードモデルとかAV出演とかが、名前を隠せばいいほうで、時には堂々と本名で披露される。

人がするからいい、のではないのである。人がしてもしないし、人がしなくてもする、というのが勇気であり、品位である、と私は教えられた。しかしそういう教育をしてくれる人に出会うことはめったになくなった。

●その人に付随してくるものを受け入れる

その人が好きになったら、その人に付随してくるものは、病気も不運も係累も、すべて受け入れるものである。それに、病気も不運も係累も、けっして悪い面ばかりではない。病気や不運は避けたほうがいいのは当たり前だが、それらのものが人間を大きく育てたというケースはいくらでも見られる。ことに係累からは、私たちはたくさんのかことを学ぶ。理想的な関係もないかもしれないが、私は夫の両親と住むのを嫌だと思ったことは一度もない。

●一致しない生き方

世俗的に出世したいという野心のある人と、毎日の生活の中に小さな美を見つけて行きたい人とは、ほとんど一致しない。

正義の感覚を大切にすると、計算高い人もあまり一致しない。

政治家の素質と、作家の素質も多くの場合一致しない。

有能な役人の思考形態と、詩人の発想とはこれまた一致しにくい。

神を信じるのと、信じないのとは、本質的に対立する。

これらはどちらがいいとか、どちらが悪いとかいうことではないのである。またどちらかが高級か低俗かということでもない。それは、大福が好きかビールが好きか、というのと同じ好みの問題である。

●笑いながら死ぬ

今彼女はほとんど眼が見えない。耳もひどく遠い。指の感覚もかなり失せている。しかし鼻はよくきき、毎日の食事、とくに好物のチョコレートを食べるのが楽しい。

「私はきっと笑いながら死ねるわよ」

と彼女は言う。

老人ばかりではない。生きる人の姿勢には大きく分けて二つの生き方がある、と私はよく思うのである。得られなかったものや失ったものだけを数えて落ち込んでいる人と、得られなくても文句は言えないのに幸いにももらったものを大切に数え上げていく人と、である。

●「知らせない権利」

どの会社にも、社外には秘密にしなければならない技術的な部分がある。

あらゆる警察や軍隊は「知らせない権利」の元に成り立っている。戦力というものは、ある場合はないように見せ掛け、ない場合にはあるように見せ掛けるのが、当然の戦略なのだから、ここでも「知る権利」など当然拒否される。

●ユダヤ人の「同志」

ユダヤ人は「同志」とは「血か金を出す人」と規定した。そのこと

のために自分も命の危険を承認するか、自分が辛いほどの金を出すだけが、同志といえるのである。日本人はせいぜいでお余りの心か金を出すのが普通なのだ。

●人脈

よく人脈というものが、重要な財産であるかのような言い方をされることがある。

そして人脈を作るにはどうしたらいいか、という方法などが特集されている雑誌も見たことがある。

しかし、これだけははっきりしている。人脈などというものは、それを利用する気がなければ、ほとんど必要ないものなのであろう。それを手蔓に商売したり、政治家として票を集めたりすることにでもなれば、確かに人脈と呼ばれるほどのものがあるかもしれない。しかし私たちが、市井の一隅で、普通に自分の力だけを頼んで生きる分には、とくに人脈など要りはしない。子供はその成績に応じた学校に入り、その年の経済によって多少の運・不運はあるだろうが、ほどほどの会社に自分の力で就職もできるであろう。大会社には、大会社のよさがあるだろうが、私の周囲にはまた大会社など入らなかったがために、伸び伸びとした人生を送れた人というのもたくさんいる。

それでも、私たちは、他に多くのことで「困った立場」に立たされることがある。

病気になった時、どういう医者に見てもらったらいいのか。年老いた親の世話が手に余るようになった時、どういう解決の方法があるのか。子供が登校拒否になった時、どうしたら親子の自然な関係を回復できるか。

たとえばそれらの問題を解決するために手を貸してくれるのは、心理的にも空間的にも私たちの身近にいる友人や知人たちであって、けっしていわゆる「人脈」と呼ばれるような人ではないのである。

●弱者は常に正しい

人を労(いたわ)るということは、相手がいい人だから労るのではない。いい人でも悪い人でも労るのである。しかし「弱者は常に正しい」などというでたらめを容認していると、真実はどんどん遠のいてしまう。

弱者にも強者にも、質は違うが同じくらい善と悪がある、とどうしてさらりと言えないのだろう。

●友情

友人同士というものは、ただ体裁よく社交的な話をするものだ、というのは、根本的にまちがっているのです。もちろん、そのような厳しさを示された時、私たちは苦しみもし、動転します。しかし人生は、ほんとうはそれほど厳しいものなのです。ですから、私たちは自分にとって苦しい人生を見せつけられた時にも、感謝ができなければなりません。それがほんとうは友情の基本でしょう。

●喧嘩も好き

人間は本質的に、平和と同時に喧嘩も好きなのだ。だから、人間は誰でも平和だけが好きだというまちがった認識の上に立ってものごとを話すと、議論が上滑りする。

●小さな復讐

定年退職後のご主人が、まったく家事がおできにならないので、手を焼いていた方なのです。奥さんは活発でお友達も多い方で、よくお芝居を見にいらっしやったりするのですが、ご主人は奥さんが外出すると聞いただけでもうパニックに陥っている。行ってはいけないとおっしゃらないらしいのですが、「僕の夕飯はどうするの?」とお聞きになる。奥さんにしたら、作ってテーブルの上において行くようにしているのだけれど、内心では、こんな日くらいインスタントラーメンでも作るか、近くへ食べに行ってくれたらいいのに、と思っ

ていらっしやる。それほど奥さんがいなくて手も足も出ないご主人が、それでもなぜか、必ず奥さんより後に死ぬことに決めているんだそうです。そこのお宅だっ

てご主人のほう

が三歳年長なのだし、平均寿命だっ

て女のほう

が長いのだから、もしかすると、ご主人のほうこそ五、六年先に死ぬ可能性があるんですね。それにもかかわらず、自分が生き残るつもりなのがおかしくて、奥さんのほうも、

「私もあなたより先に行きたいわ」

と口裏を合わせていらっしやると、ご主人は満足そうに、

「それはいいかもしれないね」

とおっしゃっていたようですが、奥さんのお話では、「先に行きます」ということは、つまり小さな復讐なのだそうです。生活無能力者のご主人に対して「後でどうなるか、一人で生きてごらんさい」ということらしいのです。

●現代人に足りない事

運命や絶望を見据えないと、希望というものの本質も輝きもわからないのである。現代人が満ち足りていながら、生気を失い、弱々しくなっているのは、たぶん、絶望や不幸の認識と勉強が徹底的に足りないからだろう。

●父の沈黙

日本の家庭では、会話に関するしつけが少なすぎるように思う。一般に女の子はおしゃべりが多すぎ、男の子は会話に参加する訓練がまったくなおざりにされている。それというのも、原因は父にある場合が多い。一家の父で家庭内では身勝手な沈黙を守っている人はあちこちにいる。今までの日本では「度の過ぎた沈黙は美德ではない」などという人はいなかった。しかし家ではしゃべりたくないから黙っているという夫たちの行為は、妻には死ぬほどの退屈、子供には不安定な感情を与えるものとしてもっと糾弾されてもいいと私は思っている。

食事は、家庭内での一種の社会的行為だから、たとえ今日はあまりしゃべりたくないと思っても、ある程度は、がまんしてしゃべらなければならないものなのである。

●家族の話

子供とはどういう話をしたらいいでしょうか、と質問された。

こんな質問を受けるとは思ってもいなかった。家族の話なんて、昔からずっとくだらないことに決まっている。どういう話、などと言われても困る。質問した人は、教育的であるには特別の話題を作って話さなければならないと思っているらしいが、家庭の会話なんてばかばかしいから心が休まるのである。

●家庭でしか教えることのできない二つのこと

今の親や先輩や教師は、いったい何をやって来たのだろうか。彼らは子供からよく思われることだけを念願して、鍛えもせず、怒りもしなかった。それはあたかも求愛する人と似ていた。

とにかくその人に悪く思われなければいい、という姿勢で尻尾をふってごきげんをとる。すると相手はますますいい気になる。おもしろいことに、いい気になると人間は要求が大きくなり、自制心を失うから、不機嫌になる。

現代は、親子が近親相姦のように不健全になりかけている。子供の人気を得るために、親はほとんど子供に逆らわない。親は子供に求愛し続けるのである。子供に悪く思われないうえなら、どんな要求でものむ。

毅然として、嫌われても何しても、取るべき態度を取る、という姿勢は、政治にも家庭にも少なくなった。それがじつは、愛から離れ、憎悪の道を進むものだという事は、明らかなのに、である。

(中略)

家庭でしか教えることのできないものは差し当たり二つある。

一つは敬語である。

敬語は他人に対する基本的な姿勢と密接な関係にある。敬語は語学技術の成果ではない。私たちが人に深い尊敬や感謝を根底において持っていれば、私たちの態度の中には、自然に相手を大切に思う気持ちが滲み出る。それが敬語である。

(中略)

家庭でしかできない教育のもう一つは、どのような人間に理想を見出すか、という基本理念である。

私は幼稚園からカトリック系の学校に入れられたのだが、そのことについて母がある時、「どんな人の前にも出て礼儀を失ったり、すくんだりすることのない人になるように」

と言っていたのを記憶している。

現世の富や権力に弱いと、そういう人の前に出た時、上がったり、震えたり、顔がこわばったりする。しかしほんとうは礼儀を失わないようにしながら、ごく自然でな

ければいけない。